

貴賤老若の別を論ぜず、苟しくも自覺を得たる人に向つて其の最も樂しかりし經驗を問はば、諸種の答案あるべしと雖も、予をして試験官たらしめば、『飯事』の二字を以つて應へたる人こそ、眞に人生の快樂と苦痛とを味ひたる者なれと言ふに憚らざるなり。

如何に富貴の人なりとも、或は位人身を極むるも、或は靈界、學界に於いて顯著の地位を占むるも、其の享樂は、飯事の無垢なる歡豫に及ばざるべし。新婚の夫婦を評するに當りて『彼れ等は飯事を爲す』とは、吾人の屢ば聞く所なれど、

一 最も樂しき經驗

現實暴露の悲哀

長谷川誠也



而も其の飯事は、幼年時代の飯事にてはあらざるなり。新婚夫妻の飯事は、既に現實世界の波瀾の一部を湛りたる後のものなり、幼時の其れは未だ現實世界に漂はざる前の遊戲なり。

飯事せし時代に還るを好まざるもの何處にかある。かの周圍の萬象は、悉くこれ美しき幻像にあらざるか。一莖の草も、片々なる一葉も、一小土塊も、人形も、木片も、皆な異彩ある道具なり、秀麗なる人間なり、山海の珍味なり。詩人哲士をして、飯事しつつある幼年男女を詠めしめよ、茲に愛の種々相あり、道義禮法の發現あり。若しも出來得べくんば、吾人は此の飯事の經驗を終世繼續せむとを欲す。

アダムとエバとは智識の果實を喰ひたるが故に、エデンの樂園を逐はれたりとか。げに恨めしきは知識ならずや。吾れ等成人は、今日少年時代に歸りて、美麗なる幻像世界に嬉戲せむと欲するも、既に現實を味ひたるが故に、望みても爲し得べからざるに非ずや。享樂の絶頂に在る幼年すらも、或る場合には、現實に歸らざるを得ざるなり。創世紀に於ける蛇にも似たる惡太郎は、邪見の棒を振り廻して、仲好く飯事する少年少女を苦しむ。少年少女の樂める凡ての幻像は、惡太郎の一喝と共に破れて、有りの儘の現實は、頗る殺風景に其の眼に映じ、可憐の少年少女は、泣いて其の保護者の家に歸る。保護者たる父兄を有する彼れ等は幸なり、吾れ等現代の人々は幻像を失ひて後、歸るべき家なく、倚るべき保護者なきにあらざるや。實に宗教も哲學も、其の權威を失ひたる今日、吾れ等の深刻に感ずるものは幻滅の悲哀なり、現實暴露の苦痛なり、而して此の痛苦を最も好く代表するものは、所謂自

川 柳

國驛社時代のついた松林
男山松も負けない腕を張り
古社松も檜も時代つき
常盤木の自然に曲げぬ八幡山
ひねくれぬ松を社へ擇て植え
石清水烏帽子を掛た松もあり
唐崎は寧ろ松下の社なり
古社芝とは見え敷松葉
門松は社頭の松にならぬなり
初日出社頭の松を先づ照し
其松へ神馬繫と村て命け
大風に禰宜は熊手を持出し
松ヶ枝の葉越に見える正一位
あの松が鎮守様だと教へられ
門松を赤い鳥居へ縛りつけ
松王は天神様の家來なり
仙鶴は社頭の松へ巢を作り
勿體をつけて村人注連を張り
猿の年眞赤な嘘を書初る

劍花坊 千古坊 星菫庵 碌々 笠天坊 酒國民 苦念坊 艶五郎 柳思樓 楓林 河太郎 不安坊 開花坊 劍珍坊 篋坊 二南坊 巖大王 毛公 木兎入

猿智恵と言はれた頃は草履取
人間の先祖の年は今年なり
泣言を背中へ話す猿廻し
猿曳は猿程藝の出來ぬ奴
柿や栗やつて狙仙は年を取り
猿廻し乞食の藝を仕込むなり
御無用の言初めに逢ふ猿廻し
猿廻し橋の袂で錢をよみ
猿曳が書入にする三ヶ日
猿曳は紐でたいて踊らせる
人眞似の新聞は皆猿を書き
猿曳の女房は猿にさんをつけ
猿曳はお辭義を猿に代理させ
猿廻し引ころがして肩へ上げ
活版を借りるは不性な年賀狀
永陽を期して御慶の下戸は逃
寝足りない顔で拜する初日出
歌がるた兄の意中を妹讀み
三ッ板で江戸兒寄せる出初式
往來で禮者名刺を交換し
歌がるた熊手の手紅葉の手

一安 西塔坊 都丸 桂村 白人 嶺坤魔 花和尚 與嘉郎 多久庵 狂太郎 文の舎 醉月坊 吞兵衛 けん坊 長谷坊 けん坊 六疊坊 胡醉生 笠天坊 吟の字 劍花坊

村長の發起郷社で年賀會
待合へ近縣旅行三ヶ日
職人は目出度く御座り奉り
拔足で名刺を投げる代年始
初刷の新聞だけを伊勢屋買ひ
學校は唱歌で動搖む四方拜
爪と羽根風の事から喧嘩をし
年始狀暮に書くのはひまな人
細君は巨燵で暮らす松の内
初日出東と思ふ方へ向き
朝歸かるたを取てなど云ひ
門松も三日がすむと邪魔に成り
かるた會下手の野郎の憤り
ハイカラの年賀は横に這て來る
鬼避に來て東京で屠蘇に酔ひ
鉢巻で御慶を受ける出初式
初夢は慾のはじめの寶船
禁酒會今年も屠蘇で脱會し
元旦や屹度改心申候
借金の春着の胸に勳四等
寶船富と競馬を當てた夢

和雷 猿月坊 彌太坊 與嘉郎 夢法師 白馬翁 愛龜 鶴嶺坊 川龍 一風齋 奴之助 皆夢 朴也 雅仙人 昇天坊 梅舟 哲之助 枯骨 戀大長 五筆 劍花坊

然派の文學なり。

二 ハムレットの悲哀

古今東西の歴史は、現實暴露の悲劇の連續なり。ギリシアの哲士が、悲劇に關する研究を試みたるより以降、幾多の碩學、此のために數千言を費したりと雖も、予は僅小の辭を以つて之れを説明し得べしと信ず。曰はく、幻像の破滅して、現實の赤裸々に現れ来る所に悲劇あるなり。ギリシアの滅亡、ローマ大帝國の瓦解、ローマ法王權の衰頹、ナポレオンの末路、近くはアリアンの世界統一的空想の破れたる、復た我が國に於いては、壇の浦に於ける平家一門の滅亡、大阪城の陷落、徳川政府の崩壊、皆なこれ美しき幻影を眺めつゝ現實を忘れ、倏然幻月の如く、空華の如き理想と實の世界との契合せざるを悟りたる大悲劇に非ずや。惟ふに讀史の興味は、成功史にあらずして、現實露出の悲哀に在り。何となれば茲に人生の深義存するが故なり。

文學史上に於いて、現實暴露の悲劇を究めよ、ハムレット王子は其の好例にあらずるか。

ハムレットは、オフヒリアの臺詞に見えたるが如く、貴公子の模型として最も優雅なる幻影界に徜徉したり。彼れ元より聰明の青年なれば、此の社會に惡意の存するを知りたりと雖も、而も惡は常に亡び、宗教的、道德的理想は、秋霜烈日の如く、儼として犯すべからざる威儀を保ちて人間社會を支配するものと確信したり。彼れは樂天論者なりき。太極の神の權威は、あらゆる惡魔外道を滅ぼして、光榮漲る世界を作

るべしとは、恐らく彼れの信じて疑はざりし所ならん。去れど一朝にして彼れは現實世界に低觸したり。父王の崩御といふ秘鍵は、此の現實世界に面すべき扉を開きぬ。而も其の死が畏るべき惡魔の毒手に因れるを知り、尙ほ其の血に汚れたる手が、王冠を奪ひ、母后を拉し、群臣を籠絡するを觀するや、渠れは狂瀾怒濤の現實海に槳帆を失ひし漂流者となりぬ。

一たび現實の相を眺めたる彼れが眼中よりは、美しき幻影悉く消滅したり。健全の世は、關節はづれし世の中と變じ、罪惡を育成するものと見え、美貌と貞操とは一致せざるのみか、一致するは却つて危險なりと看じたり。彼れは目前の社會人世の現實相を見たるのみならず、歴史に溯りても復た壯麗美妙なる幻影を失へり。彼れ言はずや、アレキサンダー大王も、死しての後は土に歸して、酒樽の孔を塞ぐに用ひらるゝともあらん、シーザルの屍も土となりて壁土用となるゝもあらんと。斯く彼れの眼裏よりは、過去と現在とに造られたる總ての理想的幻像は雲散霧消して、唯殘る物は混沌雜然たる現實の世界なりき。

さらば將來に向つて、何等かの理想を眺めたるか。彼れは關節はづれし世の中を、治療すべき職命を帶びたりと自覺したり。去れど既に混沌たる現實世界に惱みたる彼れは、其の到底遂行すべからざるを悟りぬ。彼れが看たる將來の人間社會は全く黑暗なる世界なりしなり。曩には樂天的世界觀を懷きたる王子は、今や沈鬱なる厭世觀の人となりぬ。

現實界に生存する苦惱を感じたる者は、多く宗教の下に隠れて安心を得んとす。ハムレット王子も亦た斯くの如くして安心を求めたるか。否、既に現實を知りたる彼れは、宗教といふ幻像の下に活路を見出すと能はざりしなり。苟しくも現實の何物たるかを窺ひ知れる者、誰れか亦ハムレットと共に歎息せざる。

『生か—死か—是れが當面の疑問ぢやない—逆運か投する矢石を能く堪へ忍ぶを道となすとも、將に艱難の狂浪を逆へ撃つて只一撃に禍根を除くを道となすとも。死するは—眠る—に外ならじ。眠りて心の痛みを除く此肉身を纏綿せるあらゆる苦痛を除くべく、それぞ無上の終焉なれば祈りても得まほしけれど。死するは—眠る—眠るときは—恐らくは夢を見ん。あゝそこにこそ障礙はあれ。此形骸の累ひを解脱せる時に及んで長く醒めぬ眠のうちに如何なる夢を見るやらん。それか一つの心が、いりぢや。あちきなき世に存へて命を惜むもこれがためぢや。一たび短劍を閃かいて容易く此生を辭すべくんば、誰れか濁世の辱めをおめく—と堪へ忍ばむ(中略)死しての後の危惧なくば、誰れかかかる重荷に汗して面白からぬ世に呻吟かむ。曾て一人の旅人だにも歸らぬ國のおぼつかなきに、知らぬ火宅に赴くよりはと今の惱みを忍ぶぢやまで……(坪内博士譯)』

現實に對して眼を閉づる宗教家或は理想家は、此の詞を讀みて、懼るべき懷疑の闇なりと謂はむ。現在の世界を背にし、たゞ理想界のみを瞻仰すれば、何事も之れを以つて説明し得べけれども、斯くの如き理想界は、現實とは何等の交渉も無きものなり。若しも交渉あるが如くに思惟し、或は信仰する者あらば、渠れはパンの爲に斯く言ふ下劣の人物なり、否、理想を口實として意識的或は無意識的に、自己一人の幸福を追求する野鄙なる人間なり。

プラトンは此の世の人間が狀態を譬へて、洞窟の内部に面

して束縛せられ、毫も後邊を眺むるも能はず、唯後邊に在る實在の影の窟内に映じたるを實體なりと惟へる者の如しと言ひたりとか。さても勝手の愚論なるかな。『人道主義』の著者シルラー氏(F.C.S. Schiller)は、問答體を借りて、プラトンに對して曰はく、理想なるものは甚だ可なりと雖も、束縛せられたる者は、爾を知ざるべし、また見ると能はざるならむ、何となれば爾は彼れ等に降るとなく、彼れ等は爾にまで昇ると無ければなり、我れは理想と囚人との間に立てる者なれども、理想と囚人との間に何等共通の點を有せざれば、吾れ如何に理想の圓滿無碍を語るとも、彼れ等吾れを信ぜざるべし、予にして窟内に映じたる影を、より善く看取し得るにあらずんば、余が上界にて見たるものを説くも、彼れ等は信ずるの必要を感じざるべく、信じ能はざるべく、復た信ぜざるべしと。(以上は大意を摘記したるのみ。詳しくは全氏著の『無用なる知識』と題する一章を見よ。)

現實世界と没交渉なるもの、豈啻にプラトンの理想のみならずや。有ゆる宗教的理想、又は哲學者の捏造したるもの、皆なこれ、一種の戲論にして、現實世界には要なきものなり。ハムレットが歎じて『曾て一人の旅人だに歸らぬ國』云々と言ひたると、シルラー氏が假令理想界を説明するも現實世界の人は信ぜざる可しと言ひたるは、表現の方法こそ異なれ、其の深意に於いては符節を合したるが如し。ハムレットと均しく現實の種々相を見たる者の眼には、此の世界は『淑徳却つて不徳の前に、語を卑うして頭を下げ、許容を乞はねばならぬ』澆季の世ならずや。世が澆季なるや否やは余の判斷せむと欲する所にあらねども、宗教家或は理想家の所謂徳が、不

徳の面前に跪謁するは今の状態ならずや。斯くの如き世にありて、誰れか亦理想の下に安心を求め得べき。現實世界を説明せず、嚮導せず、また之れと契合もせざる宗教或は理想の幻影を眺むるは、自ら欺く共に、人を欺く者なり。吾人に取りて最も確固たる事實は、眼前の實世界に非ずや。其の現實世界と幾多の疑問とに接したるものは、争てか抽象に抽象を重ねたる理想を信じて、此處に最後の解決を求め得べき。若し求め得たりとすれば、其は單に推理上の遊戲にあらずんば虚偽の表言に外ならず。

若しも技巧し點より論ずれば、『ハムレット』には幾多の缺點もあるべく、また不自然の點もあるべし。而も尙ほ今日に於いて其の生命を失はざるは何故ぞ。そこに偉大なる理想あるに非ず、儼しき教理あるに非ず。たゞ現實暴露の悲哀に立脚したるが故に、そは人類の存する限り、無上の珍寶として傳へらるべし。今の自然派なる者は、正に幻像を失ひしハムレットと等しき状態に在る者ならずや。然るに群多のポロニアスは彼れを指して狂なり痴なりと冷笑す。嘲ける者をして嗤はしめよ。彼れ等は、現實に生存する悲哀の裡に研ぎすましたる利刃の爲に刺さるべし。さはれ多くのホレシオ無きは遺憾ならずや。

三 『野鴨』の悲劇

強烈なる意志を有して、現實を摘發するストックマンを描きたる後のイブセンは『野鴨』に於いて、未だ會つて顯はざざりし悲觀的色調を示しぬ。彼れは尠くとも自己が所信の一部

四 生活虚偽宗を奉ずべき乎

グレゲールより事實の真相を聞きて苦悶せるヤルマルに向つて、同居人なるドクトル、レリングは如何なる治療を試みたるか。彼れはグレゲールに語つて曰はく、予は生活虚偽（諸威語を直譯すれば生活虚偽なれど、むしろ生活幻像といふ方當れりと云ふ）の療法を試みたりと。ヤルマルの父は會つて名譽ある軍人なりしが、或る犯罪のために獄卒の人となりしより以後、全く日蔭者となり、屋後にクリスマスに用ひたる樹木の枯れたるを置き、其の間に小鳥や兎を飼ひ、折々兎を射て、其の昔、大森林にて野獸を射止めたると同様の快樂を覺えたり。此のレリングをして言はしむれば、此の父の如く、虚偽の上に生活してこそ快樂幸福はあるなれ。レリングに取りては、理想も虚偽も同一の物なり。世の中は虚偽を虚偽として、毫も現實を意に介するとなき生活する所に快樂あり、幸福あるなり。有ゆる虚偽、幻影、瞞着、誑詐を排除して、現實を露出し、茲に幸福の根柢を置かむとするグレゲールにス向つて、譏辯家レリングは何等痛快の言を吐きたるぞや。

『普通の人から生活虚偽を剝奪して見給へ、これは同時に其の人の幸福を剝奪ぐとだ。』

實に虚偽にて九めてこそ幸福はあれ。かの宗教家が神佛を説くを始めとし、理想家の御談義、貴族社會の生活、或は慈善事業、或は夫婦の關係、其の他日常生活の大小巨細の状態又は關係等若しも現實を顧みるとなくんば、皆な圓滿なり、

を客觀視して、主人公グレゲールを描き、其の主義の實施は果して如何なる結果を生ずべきかを思考したりとは、多くの評家が一致する所なり。而して最後の舞臺は、現實暴露の悲惨なる光景なり。

エールなる者、その汚したる婦を寫眞師ヤルマルに嫁がしめぬ。ヤルマルは無垢の婦と信じて樂しき家庭を作り、ヘドキヒと云ふ女兒は生れき。後十數年を過ぎ、久しく他處に在りしエールの子グレゲール歸郷するや、親友ヤルマルが欺かれたる日を送るを見るに忍びず、密かに父とギナ（ヤルマルの妻）との關係をヤルマルに告ぐ。蓋し彼れの意は、事實を明白にするに因りて、却て神聖の家庭を作り得べしとなり。一たび現實の如何を知りたるヤルマルは、愛する女兒すらエールの子なるを推知して憤怨措く能はず。而して父の愛を失ひしヘドキヒは、遂に自殺せり。グレゲールは現實摘發を目的とし、其の主義を實行したれども、結果は安寧幸福にあらずして、可憫なる少女の悲惨たる最期となりぬ。グレゲールに眞實開陳者たらずんば、ヤルマルの家庭は極めて平和に幸福に、恒に笑聲を以つて満ちたりしならん。野鴨の彈丸を受くるや、深く水底に沈みて其の姿を隠すとか。されど賢しき獵犬は傷ける鴨を水面に銜へ出づ。傷ける野鴨に似たるヤルマル一家には、グレゲールと言ふ獵犬來りて、その淺ましき傷を摘發したり。樂しき幻影は倏然消滅して、五官に觸るゝもの皆なこれに現實の悲哀にして、そはハムレットを奪ひたるが如く、ヘドキヒをも奪ひ去りぬ。

高雅なり、美麗なり。されど一たび其の皮を剥ぎて觀ずれば雲泥の差あるにあらずや。臭き物には蓋をせよとの諺を奉じて、毫も現實を顧みることなく、虚偽の幻影の裡に生存する人は幸福なり。一個人に就きて言ふも、吾れは救れたりとか、吾れは異常の才能ありとか、或は深遠の學識ありとか、或は賢聖なりといふが如き幻像を造りて生活するは、吾が價値を自覺する者よりも遙かに幸福なり。去れどハムレットは我れなる現實を自覺したるが故に惱めり。吁、嘗に一個人のみに非ず、人生其の物の現實を味へば、たゞ夫れ悲哀の度數昇るのみ。

さらばレリングに従つて、生活虚偽の法を守るべきか。一たび現實を眺めたる者は、遂に虚偽の幻像界に歸ると能はざるなり。幻像を眞如と認めつゝ生活する者は幸なり、また彼れを咎むべきにあらず。されど幻像と知りつゝ虚偽の生活を營むと、これ吾れ等の爲し得ざる所なり。吾が體內に病毒ありと知りて、而も之れを隠蔽せむとする者何處にある。吾れ等は生活虚偽宗の同情者たると能はざるなり。

五 寧ろドン・キオテたらん乎

ハムレットの作者と同時代なる西班牙のセルヴァンテスはハムレットと全く相反したる性格を描きぬ。尊嚴なる騎士道に據りて、紊亂せる社會の秩序を匡むため、従者サンチョと共に、武者修行の途に就きたるドン・キオテは、純然たる空想家なりき。理想の幻像を逐ふ善人なりき。

ドン・キオテは全然此の眼前の現實を顧ざる人物なり、否、

其の能力なき奇物なり。彼れの眼に映じたる現實は、悉く騎士道を標準として幻像化せらる。驚馬ロヂナンは天晴逸物なり、古ぼけたる鎧も珍代の甲冑なり、怪しげなる槍も名匠の鍊へし武器なり、村の乙女も王公の姫君なり、百姓のサンチヨも忠誠なる従士なり。彼れは田舎娘を貴婦人と崇拝し其の爲に騎士道を磨かむとて、古道具屋も迷惑するが如き甲冑を着け、武器を携へ、驚馬に跨り、唯これ物質にのみ執着する土百姓を従へて郷土を去りぬ。彼れが眼には一小村の旅店も、巍然たる城廓なり、野に草薙る田舎娘も王公將相の姫君が惡漢のために苦めらるゝもの、怪しき服裝せる農民は惡魔なり、僧侶は魔法師なり、羊の群は怪物の軍隊なり、森林は奸賊の隱家なり。げに一事一物、皆な幻像化せられざるは無く、而して彼れは其の幻像世界に在りて、天帝の定めし秩序を恢復せむとを謀りぬ。

秒時と雖も現實世界に還らず、幻化の世界をのみ眺めたる彼れの一生は、奮闘の歴史なり。現實を回顧して逡巡躊躇するハムレットに比すれば、ドンキオテは、正反對なる實行家なり、活動家なり。彼れの思想と行爲との間には一厘の隔隙もなく、思想即ち意志なり活動なり。彼れは惡と見れば直に之を除かむとし、毫も自己の利不利を顧慮せず。げに水車と喧嘩するが如きは、ドンキオテならでは能はざる所なり。而して彼れは多くの場合に於いて失敗せり。愛すべき騎士は幾たびか傷を蒙り、侮辱せられ、狂人視せられ。去れど毫も恨む所なく、自分の修業未熟なるを責むるは彼れなり。予はツルゲネフが語を藉りて彼れを紹介せむ。

はサンチヨ隨ひ、ヤルマルとグレゲールとの間にはギナ立つ。此の三人は共に現實主義の徒なり。彼れ等は初まり理想なるものを有たざりき、美しく正しき幻像世界に優遊したるとなかりき。現實の裡に生れて、現實に満足し、五官に觸るる現實以外を顧みず、曾つて自覺したるもなく、禽獸にも均しき自己満足を楽しみて醉生夢死の境涯に終る人物なり。理想家、或は理想と現實との中間に懸りて懊惱する者の眼より見れば、彼れ等は俗物なるべし。去れど彼れ等の眼に映じたる理想家又は煩悶者は、憐むべき狂者なるべし。

ポロニアス式の人物となりて、吾れは何事をも爲し得べし、何事をも知りりと自信して現實の満足を楽しむは幸なり。されど多數の人は、茲に安心の境を發見せざるならん。言ふ迄もなく現實界は紛雜混沌たり。人は此の境を遠離して、秩序整然たる極樂世界に入らむとを欲す。寔に宗教的、哲學的倫理的思索行はれて、理想なるもの構成せらる、既に理想の天地を想像すれば、此の世界は穢土なり、濁世なり。既に濁世と觀するが故に、眞面目なる理想家は、これを清めて理想界を實現せむと試む。ドンキオテ式の人物即ちこれにして、吾人は其の誠實なる狀態を稱揚す。

去れど理想は如何に崇高なるも、畢竟するに一人或は少數の人々が抽象的作用によりて作りたる小主觀のみ。廣大無限の現實世界を背後にして、單に理想より演繹すれば、理想には不可犯の權威あるべく、現實其の物も亦た理想化せられて一のコスモスと變じて、解説の困難なかるべし。されど一たびケオスの現實界に接觸すれば、如何なる理想も虚偽なるを

『ドンキオテは理想に對する信仰を肝に銘じたる人にして、其の爲には有ゆる辛苦を忍び、生命の犠牲をすら辭せず。彼れに取りて、生命とは理想を彰表し、地上に眞理と正義とを顯揚するに仕ふる點にのみ價值あるなり。彼れは其の同胞のため、また人類に反する勢力——魔女、惡魔、即ち壓制者——に反抗せむが爲に生存す。故に彼れは能く忍耐し、且つ懼れを知らず。彼れは粗食粗服に甘んず。其の意此處にあらざればなり。』

ハムレットは同情すべき人物なり、ドンキオテは尊敬すべき人物なり。されど現代には幾許のドンキオテありや。理想を口にし。神を讚美する者其の數幾百萬なるを知らずと雖も多くは皆な活動を伴はざるドンキオテならずや、似而非ドンキオテは社會の大部分を占め、その最も秀でたる者は、宗教家とか、或は理想家哲學者とかの名を戴きて、裏面には現實上の利得を貪りつゝあるに非ずや。彼れ等は一人のハムレットをだに救ふと能はざる無能の徒輩なり。吾人は似而非ドンキオテたらむよりも、寧ろ物質主義、現實主義のサンチヨバシヲたらむとを欲す。

吾人はドンキオテたり得べき乎。彼れたるは幸福なり。去れど一たび現實を眺めて、其の混沌として、所謂理想の影など無きと認めたるもの、奚んぞ能く理想郷に歸り得べき。勿論一種の遊藝としては、理想界に逍遙するを得べく、所謂天父を説き、天國を語り得べし。而して此れほど容易なるはなく、復た都合好きは稀なるべし。されど其は畢に遊戲のみ。球を突くとの異なる所あらん。

六 自然派文學の背景

ハムレットの側にはポロニアスあり、ドンキオテの後に

知るべし。

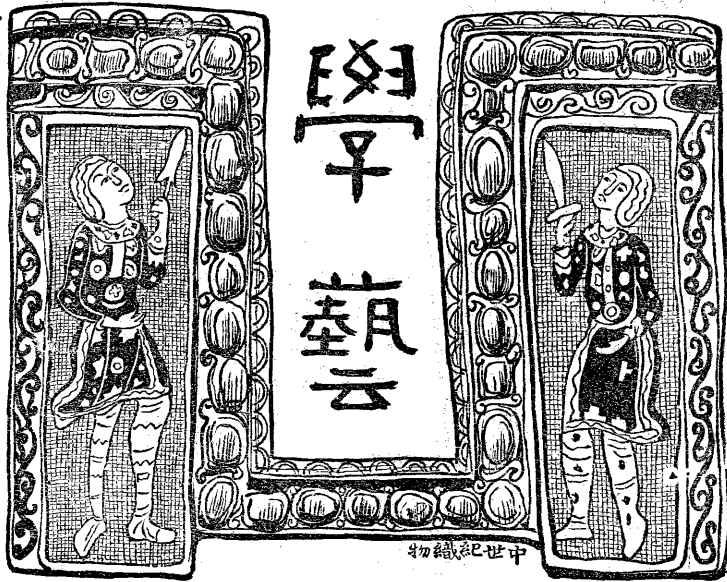
幻像的理想の破滅したる後に、殘る物は何ぞ、現實なり。世人は理想的に現實を解釋せむと欲するが如し。否、斯くの如く物せずんば恥なりと思惟するが如し。アングルセンの敎訓談(案衣大)に現れたる人物は今の理想家に似たり。或る着道樂の大名の下に來りし織工、霞の衣を織るべしと約し、且つ言はく罪業深き者には此の貴重なる衣、見えざるべしと奥方以下多くの臣下等皆な衣服の形を見ざれども、有罪と言はるゝが恐しさに美しき衣なりと稱し、大名も亦た同じ心にて、霞の衣着たる氣にて實は裸體のまゝ城門を出てたり。而して獨り大名の詐偽にかゝれるを揚言したるは兒童のみなりきとか。所謂理想主義の人々は此の大名と臣下との如し。理想主義を遵奉するからには、眞のドンキオテ的活動あるべきに、さは無くして徒に言論のみを逞うするのみなるは、胸中幻像を失ひながら、而も其の自白を敢てするの勇氣なきを證するものなり。

幻滅の經驗を嘗めたる後、殘れる現實界を觀ずれば、其處に理想的に判定せられたる價值を認めざるべし。否、吾人の價值の判斷は、幻影界に執着せる時代とは全然異なるとあるべし。賣國奴の兒ボレスロウ(メクアルマン氏著、備稿の主人公)は基督教に執着せる間こそ、誼はれたる父の屍を教會墓地に葬らむが爲めに危険を侵せり。去れど一たび基督教的理想を離るゝや、現實は瞭然として彼れが眼に映じ、昔の戀人たるレナノの姿は消滅して、從來賤みたる自然兒レギナは新しき戀人となりぬ。而して其の情人の屍を、明月の光に浴しつゝ鄙

理學博士飯島魁君の談と題し、去年、十月二十二日の東京朝日新聞に、『魔鏡』の事が記載して在る。又しても、狩獵の話カネ。今更、犬の話や、鐵砲の話なども古るい、――

理學博士 鶴田賢次

家庭及旅行用『魔鏡』の理



先づ何も無いヨ。エ、――今朝(二十一日)遊獵から歸つたと聞いたつて、ドウも早イナ、――驚いたネ。

『デは、白狀するが、――實は、一昨日、夜汽車で仙臺の方へ行つたのサ。鳴が百五十羽、――餘り太した獲物でも無かつた。然し一ツ新しい御寶を利用して見た。ソレをチョツと御話しやう。』

『「イッソツ」物語の中に、『魔鏡(マナツク)』の話がある。ソレからは、何ンでも欲しい物が出て來るといふ、――日本ならば、打出し小槌だらうネ。今話しやうといふ鏡も、近頃、英國にて發明された品で「テルモス」と名付けてあるが、氣取つて『魔鏡』とも名付けてある。大キさは、懷中入れウキスキー鏡の位、形も當り前の鏡の様だ。厚い皮筒の内に入れてある。鏡其物は二重である。其隙キ間よりは、全く空氣を取り去つてある、――ソレで、熱が導かれぬのである。口はコルク栓を以て閉ぢ、ソレにニツケルの振テ蓋が冠らせてある。構造は、先づ斯様に簡單であるけれども、其効能を看ると、驚くネ。』

『ソレに熱い物を容れると、其温度は、三十六時間(本篇筆者は多過)殆んど少しも減じ無い。又冷い物を容れて置くと、一日半は、(筆者註。コレも少しも變はらない。就中、氷と紅茶は尤も妙だ。山中、何も無い處へ行つて、ビールや、ラムネの中に投じると、實に好いネ。私は、樺太で「ロシア」人から屢々紅茶の御馳走になつたとあるが、――旅行中は茶に限る。ホイ、談話が横道へ這入つた。』

『昨日、仙臺から、ズウと、山の中へ進行したが、――一面

教的に庭内に葬りながら、往日父の屍の爲に苦慮せしを悔みぬ。現實に接したる者の態度正に此くの如し。

幻像的理想は總て滅びて權威なく、理論の圓滿完全を尙ぶは唯これ一種の遊戲のみ。幻滅の經驗を味ひたる者にとりては、たゞ有りのまゝなる現實の映ずるのみ。而して現實界は無邊無涯なり、其の生滅變化の相また無限なり。時所共に無限の變化ある現實界に向つて、理想の鎗を振ふも、何の功かあらん。否、現實界と没交渉なる幻像を眺めて満足すると能はざるなり。されば吾れ等は唯吾が觀たる現實界を基として人生を説くを以つて満足せざるべからず。これ自覺的現實主義にして、其の哲學界に現れたる最近の形式はブラグマチズム(實際主義或は人間本位主義と譯すべきか)にして、文藝界に表れたるは自然主義なり。

泣く生物として生れたる人間の社會には、『唯泣くとのみ永續す』(ルカ)樂しく、美しく、正しく、崇高に見えたる一切の理想は霞の如く消え去りぬ。幻像の消滅すると共に、靈妙不可思議なる神祕的の創造せりと稱せられたる現實界は、秩序ある機械的變化を示さずして、只盲目なる勢力のために無限の變轉を爲す。『往きたる者は消ぬる泡。來らん者は遊絲の暫し髣髴く水の影。げに何者を父母に。何方往くらん何爲歟も。生死の海に長さ夜を何時まで夢に漂泊兒。あゝ、おぞまし人の子ら。』(坪内博士著『新曲曲鳴』)吾れ等は現實の和を傳ふのみ。理想家が蔽隠せむと勉め、或は醜陋として排斥したる點をも忌憚なく開陳するの任務を帯びたりと雖も、而も其の背後には悲哀の感あり。



歐大陸に於ける自然主義の潮流を見よ。其の背景は沈痛なる幻滅並に無解決の悲哀にあらずや。イブセンが劇、ハウプトマンが作、其の最も奥なる背景は、荒涼たる寂寥の天地にあらざるか。ニイチエが稱揚したる超人の裏面には悲慘なる光景横はらざるか。モーパッサンが作の全部に通じたる背景は、灰色にも似たる幻滅の悲哀にあらざるか。ニイチエ、モーパッサンの悲しむべき最期を生理的にのみ歸すると勿れ。現實暴露の悲哀は竟に彼れ等を狂死せしめたるなり。彼れ等自然主義の一派は、醜陋、鎖末、非理想的、非藝術的、反道德的、肉欲、性慾的を面白がりて描寫するにあらず。其處に偽なき現實を認めなければこそ此れを描け、而も背景は深刻なる悲哀の苦海なり。

人は年長するに従つて青年時の幻像を失ひ、ますます現實に接して愈よ悲哀を感じつゝ最後に死滅といふ現實に接す。人類の社會復た亦此くの如し。現に今の世は、往昔に比して更に深大なる悲哀を感じつゝあるに非ずや。タツソノ諸ふらく『世界は年々取り、年とると共に悲み多し』と。此の無増進の悲哀を後景とせるもの、實に近代文藝の生命なり。又此の景を離れて血肉ある文藝は成立せざるべし。